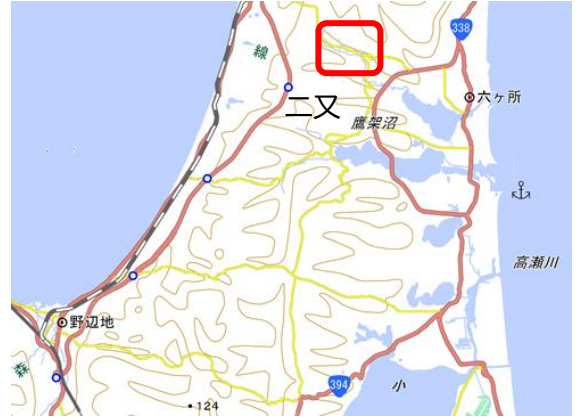




【日程】9:30 郷土館集合 (日程説明と諸準備: トイレ休憩あり)→9:50①富ノ沢遺跡(遺跡の説明・昔の土器拾いの思い出: 秋戸操)→10:10②石神様と③馬除け土手の見学: 秋戸淳一・二又空襲の話: 秋戸吉郎→10:40④二又神社(明治期の軍馬の歴史と二又地区の暮らしについての説明、土塁の見学: 秋戸薫)→11:20⑤防空壕の見学 (秋戸淳一)→11:50 ⑥二又川の散策 (魚・カワシンジュガイ: 秋戸淳一)→12:30 現地解散

1 地理 二又地区は、下北半島首部の東海岸に広がる六ヶ所村の北西部内陸にある吹越烏帽子岳山麓の谷や沢のうちの一つ、二又川の沢地にできた集落である。一面の湿地で「ハッチャキ沢」と呼ばれていた。

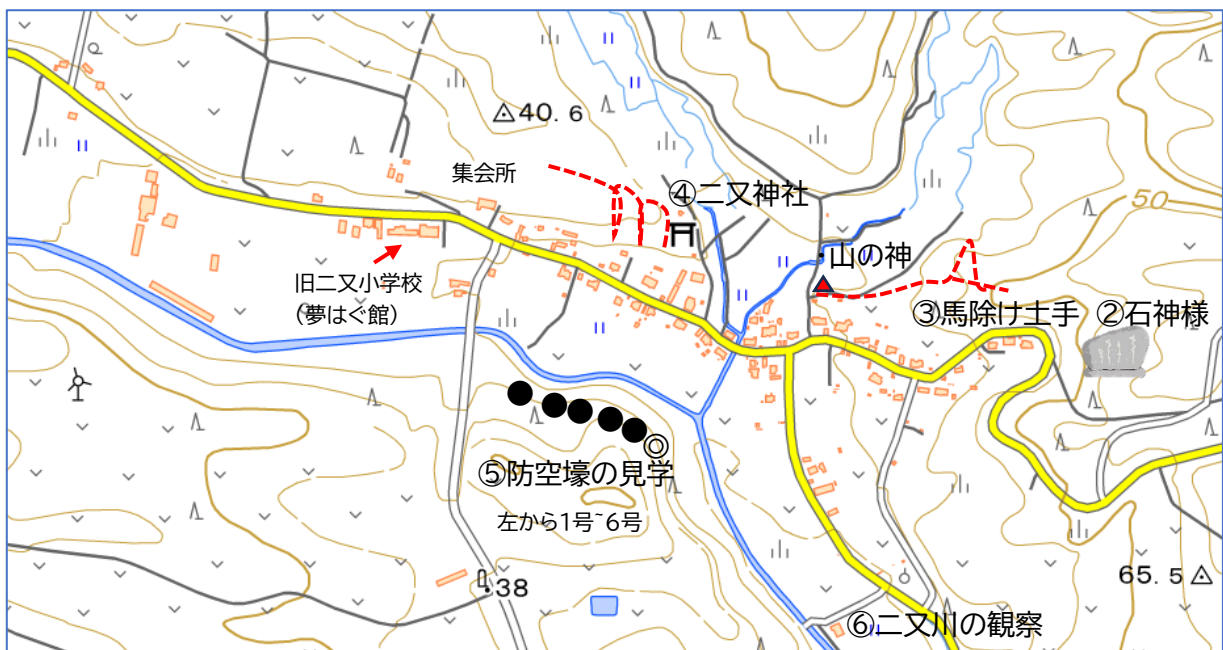
2 街道 尾駮坂を越えて尾駮方面へ通る道と、西は「坂渡り」と呼ぶ坂を上って雲雀平へ出て横浜町に通じる県道、西南へは旧マチクボ道を通して野辺地町へ行く道と、二又川に沿って南下し台地へ上って弥栄平を通り、室ノ久保や戸鎖に出る道がある。



二又地区の位置(※出典:国土地理院地図一部加筆)



二又地区の位置(※出典:国土地理院地図一部加筆)



二又魅力発見ツアーの見学場所の位置(※出典:国土地理院地図一部加筆)

3 集落の歴史 江戸時代の「邦内郷村誌」によれば、二又集落は、「尾駮村の内、二又5軒」と記され、現在の秋戸家・川畑家・中嶋家とみられ、戦前まで総代はこの三家の輪番によって務められたという。戸数の動向は、明治年間5戸、大正15年15戸、昭和20年28戸、昭和46年43戸であった。太平洋戦争による戦災で、集落の半数が消失した。

4 主たる生業 明治以来の主たる生業は、軍馬の生産と製炭業であった。終戦により軍馬の生産や昭和30年ごろから製炭業も需要がなくなり、農業に依存するようになる。かなり古くから米作が行われていたようだが、減反政策もあり他の職業で現金収入を求めているようである。

(1) 作物別収穫面積 総面積6,447a(昭和48年度調査)

- ① 稲 (2,992a) ② 工芸作物類 (2,300a) ③ 飼料用作物(750a) ④ 豆類 (220a) ⑤ イモ類 (85a)
- ⑥ 雑穀 (65a) ⑦ 野菜類 (35a)



最後の炭焼き(旧二又小)(H14年:2002年)  
※写真:夢はく館提供

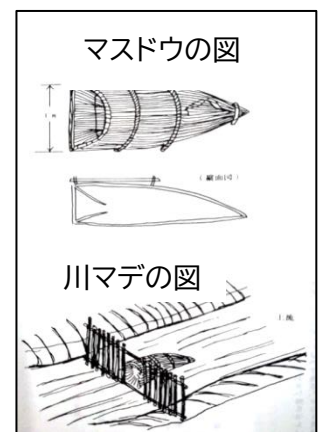
(2) 製炭業 明治初頭には行われていたようで、大正4,5年までは

「ホリガマ」によるシロズミの生産で沢のある崖を利用して行われ、一日に3俵を焼き上げれば最高だった。製品は丸タワラにつめ、主に野辺地町に出荷していた。大正年間に田子村の奈良崎・田茂の両氏によってドガマによる製炭法が伝えられ、伐採し

た便利なところで炭を焼くことができた。一か月で百俵焼くのが普通だった。ナラ・カシラギが一等炭で、ブナが二等炭、その他の雑木炭はジャグと呼ばれた粗悪炭だった。原料は、全て国有林の山を払い下げて伐採されて、昭和に入り営林署の森林鉄道を利用して産業組合を通して出荷された。旧二又小学校でも炭焼き体験学習が行われ、全国表彰されている。

5 儀礼・禁忌 12月12日は山の神の祭日で、集落あげて祝った。この日は山ドメになっていて「鉄音をたてるな」「山へ入るな」と言われた。また、若い人たちによる能舞が秋戸利明宅で演じられ、集落の人がすべて集まって観たものだった。山に関する禁忌としては、「朝に汁かけ飯を食らうな」「山で口笛吹くな」「山の中で大声出すな」というようなことが言われた。現在、地区内に小さな祠がある。

6 漁労 二又川と尾駮沼にそそぐホチャギ沢の所の川漁であった。4月から5月にかけて春はサクラマス、8月末から11月にかけて秋はサケ・マス「川マデ」でとった。川マデは、大正初期に秋戸権治さんが考案したもので、川の中に杭を立て並べ中央部の開けた所に竹製のドウを設置する方法で、多いときは一晩で50匹もとったという。



マスドウと川マデの図

※出典：青森県教育委員会「むつ小川原地区  
民俗資料緊急調査報告書」第二次 1973

4月末から5月は、ジャコと呼ばれていたウグイが、産卵のため川を上る。これを焼いて乾燥させ、正月魚<sup>しょうがつうお</sup>としてとっておいた。ナマジコは、タラ漁のえさとして、吹越や百目木の人々がいくらかでも買っていった。エビは、「エビドウ」（長さ70cm×径15cm）を20カ所も30カ所も仕掛けた。エビの漁期は、盆から秋にかけてで、一晩に1升もとったという。酒やビールのつまみとして料理屋に売れるので、青森や野辺地の仲買人が来て買っていった。イワナ・ヤマメは釣り漁で、イワナは6月から8月、ヤマメは8月から10月へかけてよく釣れた。多いときは一斗缶にいっぱい釣れることも珍しくなかったという。

## 7 狩猟

秋戸彦蔵、中島清松、秋戸宇之吉の3人の鉄砲打ちがいた。主に冬期間、狩猟を生業としていた。このうち秋戸宇之吉さんは、昭和30年ごろまで続けていたという。タヌキ・マミ・キツネ・ウサギ・クマ・ヤマドリ・キジ（昔はアオジシも含まれた）などが獲れ、猟犬を使って追い出し、鉄砲で仕留める方法であった。クマ・キツネ・タヌキ・マミの毛皮は良い値で売れ、特に寒中に獲れた毛皮は「寒皮」といって値がよく、野辺地の沖津という毛皮商に売った。津軽や秋田から毛皮の仲買人が来たのでそれにも売った。肉は売ることもあったが、部落の人々に分けてやった。

## 8 畜産

(1) 馬は、乗馬用のアラブ種<sup>※1</sup>・ノルマン種<sup>※2</sup>・労役用の北海道ペリー種も飼っていた。牛は、短角と和種のメスを飼育して子を産ませた。集落の西北側（一枚橋と坂渡りの中間）にあった集落の放牧場に馬を放し、牛は、集落周辺の山野に放牧した。



馬耕の様子（昭和30年代）

※写真：二又 秋戸淳一氏提供

(2) 馬は、2歳駒になると七戸の競市で売ったが、良馬は軍用馬として陸軍補充部に買い上げられ、5歳になるまで民間に預けられ飼育された。どこの家も10頭から20頭くらいの馬を常時飼育していた。馬は、4月から10月迄集落の牧場に放牧し、11月に入ると各自のマヤで飼育した。草刈り場は、春に野火を付け、種付けは4月と5月に行われた。出産は、2月から3月にかけてマヤで出産したが、集落に牧夫経験者が多かったので獣医の必要もなかった。



放牧場(旧二又小学校跡地)

※写真：二又 秋戸淳一氏提供

(3) 牛は、春から秋まで集落周辺の山野へ自由に放牧した。10月になってから集落総出で牛を探し出した。これは、半月から1カ月間もの日数を要したという。各家の牛の目印は、角に刻み

※1 アラブ種：主にフランスでこのアラブ種とサラブレッドとを交配させたのがアングロアラブであった。日本では、アングロアラブは軍馬として用いられた。

※2 ノルマン種：フランス北西部、ノルマンディー地方原産の馬。乗馬用で毛色は鹿毛（かげ）が多い。

目を入れていたが、大正年間に焼き印が入ってきた。11月から3月まではマヤで飼育し、乾草を細かく刻んだものをやり、時々味噌を混ぜて飼育した。種付けは放牧中に自然に行われ、出産は正月から3月にかけて行われた。



神社裏の土塁 陸軍陸地測量部作成地図 大正6(1917)年発行 一部加筆  
※郷土館職員撮影

(4) 馬市は、毎年10月上旬に13から14日間にもわたって、七戸で開かれた。早朝5時に出発して午後2時頃に着いた。大正期から昭和初期頃、2歳駒の良馬は、陸軍補充部から120円※3から130円くらいで買い上げられた。これから外れると15円から20円程度にしかならなかった。軍から買い上げられた2歳駒は、5歳になるまで委託され預かった。3年間預かって20円くらい飼育料が出され、納入するとき馬の育ちがいいと報奨金が出た。牛の競市は、毎年6月上旬、尾駁で開かれ、主に2歳牛を尾駁に引いていった。二又では、牛を多く飼育していたので、博労が多く出入りしていた。田名部や馬門、有戸や七戸、上北方面から来たという。



奨励金授与賞 秋戸権治氏  
※秋戸薫氏より提供:金70円は、現在の約10万円に当たる

※出典：青森県教育委員会「むつ小川原地区 民俗資料緊急調査報告書」第二次 1973

## 9 二又牧野記念像の由来 (二又神社前に設置されている二又牧野記念像の碑文)

「二又周辺の原野は、その昔、蟻渡の牧の内産馬地であった。明治時代には、千数百ヘクタールの原野が放牧地として利用されていたが、諸般の事情から17名の組合員により、昭和5年、百二十ヘクタールを二又牧野として活用してきた。然し、昭和20年の終戦後最盛時、二百数十頭放牧されていた馬は、農業構造の变革と農業機械の発展により昭和42年には牧野には全く馬の影もなくなり、畑地、芝作り等として利用してきたのであるが、昭和51年村有の草地として地域畜産振興のため活用されることになった。茲に、二又牧野の往時をしのび、今はなき数多くの耕馬の霊を慰め、又先人の労苦に報いるため17名の先祖がこよなく愛した馬像を奉納し記念とする。昭和53年7月 二又牧野組合同」



二又牧野記念像

※郷土館職員撮影

※3馬の値段(昭和2~12年の平均) 軍馬は324円、その他は129円。良馬は2,000円以上もの値がついたそうだ。ちなみに当時は米1俵が7~8円(現在は約1万8千円ぐらい)だったので平均的な軍馬は1頭78万円になった。2千円は、約5百万円以上もあったようである。

参考文献：青森県教委 1974 『むつ小川原地区 民俗資料緊急調査報告書(第二次)』

## 二又の石神様

尾駁から二又地区に入る入口の坂に、大きな自然石が二つハの字に並んでいた。「昔、ここを通りかかった旅人の歯が痛み、この大石にかみついたら、雷神様が宿っていて痛みが治った」という。それから村人は石神様と呼んで、歯が痛いときは、この石にほおをこすって拝むと、痛みが止まると信じられていた。それからは、二又地区の人々は、この石の近くを通るたびに拝んでいたという。二又地区在住の秋戸慶典さんは、「昔、歯が痛いときに石神様に頬を当ててみたら、石があったかくて自然と痛みが治ったことがあった」そうだ。※中央公民館報「かわらばん」昭和53年より

平成に入り間もなく、二又集落に水道管を引く工事があり、その際、石が撤去され、現在の石が設置された。※二又住民からの情報



二又地区の石神様  
中央公民館官報「かわらばん」昭和53年より転載

### 二又の石神様:官報「かわらばん」の写真より

白黒写真ながら、二つの大きな石は、板状か、柱のように角張っている。新第三紀中新世中期の約1,600万年前から1,540万年前に起こった浅瀬の海底火山の噴火時の貫入した溶岩(泊層)とも取れる。溶岩が、徐々に冷え固まり柱のように割れ目(柱状節理)が入り、長い間の雨風の浸食により地表に顔を出した岩石(安山岩)か?現在の石神様の石の周辺や集落内でも、同様な石を確認できることから、谷川に堆積した礫とも考えられる。(館長)



泊海岸のタタミ岩(玄武岩質安山岩)※郷土館職員撮影



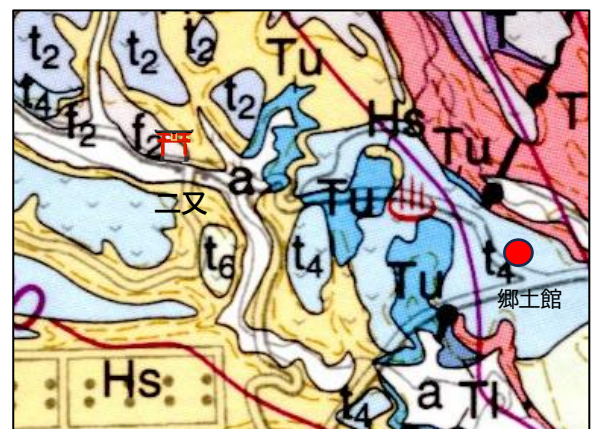
雪の中に静かに鎮座する現在の石神様

※郷土館職員撮影



石に孔が見られる※郷土館職員撮影

『この石は安山岩で、赤茶の部分には鉄分に鉱染されたように見える。表面の孔は、浅い海の岩に孔を開けるカゴメガイ(穿孔貝)の巣穴で、谷底低地の堆積岩が、取り残されたもの』と考えられる。※県立郷土館副館長島口天氏による解説



国土地理院地質図(二又地区周辺)

- t 4 : 第四紀中期更新世(約3,000年前)の海成段丘堆積物(砂及び泥)。
- Tu:新第三紀中期中新世(約15,00万年前から約1,300万年前)の鷹架層(上部珪藻質泥岩)で、浅瀬の海の堆積層。
- Hs : 新第三紀鮮新世前期から第四紀更新世前期の甲地層(約400万年前~約77万年前)の砂岩及び泥質砂岩。
- a:完新世(現在から約1万年前)の谷底低地堆積物(礫や砂及び泥)。

## 六ヶ所村の太平洋戦争の歴史年表

1941 (昭和 16) 年  
 4月1日  
 12月8日  
 1942 (昭和 17) 年  
 2月10日  
 4月19日  
 1943 (昭和 18) 年  
 3月18日  
 4月22日  
 6月11日  
 6月以降  
 1945 (昭和 20) 年  
 7月14日 (土)  
 ~15日  
 7月14日  
 〃  
 7月15日  
 7月28日  
 8月6日  
 8月9日

村内各尋常小学校が、国民学校となる。

対米英宣戦布告、ハワイ真珠湾を空襲し、太平洋戦争が始まる

三沢海軍航空隊ができる

米軍機が日本本土を初空襲する

泊国民学校が全焼。諏訪神社・大乘寺・郷倉・作業場・青年会館、民家を借用し分散授業を開始。

泊沖を航行中の汽船西南丸が、アメリカの潜水艦の魚雷を受けてハネダの磯に座礁する  
 3年生が砂浜で運動中、米国の潜水艦からの魚雷が目の前で爆発し、上級生の誘導で無事避難した。

米軍潜水艦の電撃により泊（小田中浜:諏訪神社付近）で、**死者1人（女）**が出る  
 泊に監視哨が設置される

**北海道空襲**:北海道各地で行った空襲の総称。アメリカ海軍の第38任務部隊は、北海道南部から登別市沖合へと展開。13隻の航空母艦から延べ3,000機以上もの艦載機(グラマンF6F-5ヘルキャット)を発進させ、留萌市以南の北海道の主要都市に無差別爆撃及び機銃掃射を行った。船舶に対しては雷撃も行われた。

**青函連絡船の空襲被害**:アメリカ海軍空母機動部隊が、尻屋崎南東110カイリ(198km)の発進海域に到達。第3艦隊の空母から発進した第38・3任務群が、航空母艦エセックス、ランドロフなどから発進した米軍艦載機約700機が、北海道・東北地方を空襲。青函連絡船12隻(8隻沈没、2隻大破炎上、2隻航行不能、352人死亡)が撃破され、各地で被害を受ける六ヶ所村、早朝より警戒警報発令。

午前5時30分、**尾駈・鷹架集落**が米軍グラマンF6F艦上戦闘機の銃撃を受ける(県史 通史編3 P286参照)

鷹架小学校沿革史より「被害、爆弾3個投下されるも被害なし。グラマンF6F艦上戦闘機の機銃掃射により弾痕サクリ貫通、南側57発・北側14発・教室内55発、屋根10ヶ・硝子30枚」早朝のため子供たちが難を免れた。

**出戸・倉内**が米軍艦機の銃撃を受け、**死者各1人**出る(出戸の小泉陽大さんの祖父)  
 ・学校も防空壕づくり始める。

青森大空襲、市内のほぼ全域被災、死者732人、焼失家屋4,964戸、被災者約7万人。

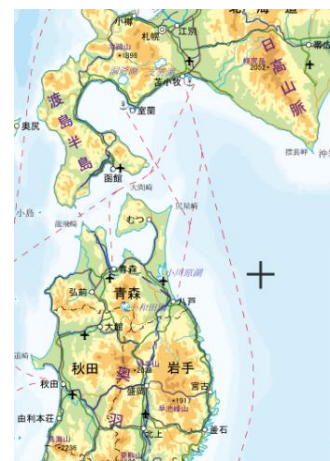
広島に原爆が投下される。

長崎に原爆が投下される



米海軍ガトー級潜水艦

出典: フリー百科事典『ウィキペディア』



米海軍空母機動部隊の到達位置十

出典: 国土地理院地図より一部加筆



米海軍空母機動部隊

出典: フリー百科事典『ウィキペディア』



グラマンF6F-5ヘルキャット

出典: フリー百科事典『ウィキペディア』

8月9～10日

再び米軍艦載機約 1,7000 機が北日本に襲来する  
**大湊空襲**：アメリカ海軍第3艦隊の第38任務部隊などの空母搭載機が北日本一帯を空襲した。9日早朝6時に大湊町にも空襲警報発令。数時間後には2回目の空襲警報が発令され、大湊湾にアメリカ軍の空母艦載機が襲来した。碇泊中の艦艇や陸上砲台から応戦したが、「常磐」「柳」が大破した。「常磐」は浸水が激しく芦崎湾に擱座して、辛うじて沈没を免れた。死者129名（「常磐」の乗組員が109名、「柳」の乗組員が20名）、負傷者は300名以上だった。

**本県三度目の空襲**：アメリカ第3艦隊38任務部隊とイギリス機動部隊（第37任務部隊）の攻撃目標は本州北部（八戸・大湊・三沢）。攻撃隊1,373機、制空隊409機。

8月9日

**二又集落の空襲**：大湊空襲が終わったかと思う間もなく、午後1時50分から2時14分まで、二又神社の上空から米軍艦載機2機ずつ3編隊都合6機が数回にわたり、二又上空を旋回しながら焼夷弾投下や銃爆撃を加える。**死者2人**、住家13戸が焼失する。

**火災発生**：空襲が始まって間もなく、中嶋福蔵、附田与三郎の両家からほとんど同時に出火。火が出て、攻撃が止まらないので、手も足も出ず。防空壕や橋の下、大木の影、地のくぼみに退避していたので燃えるに任せる状態で、燃え広がっていった。その順番ははっきりしない。

**犠牲者**は、中嶋福蔵氏（58歳）で、場所は附田与三郎氏宅の中、空襲が始まる直前まで附田氏宅に数人でいたが、空襲が始まると同時に飛び出し、愛馬を空襲から守るために曳いていたのが最後で、いつ、何のために再び同家に戻ったのかだれも見えていない。焼け跡から、発見された遺体は、東側の土間にうつぶせになり、四肢、胸腹部とも完全に近かったにもかかわらず頭蓋骨がなかった。銃弾を避け土間に伏した時に、機銃弾を頭部に受けたと推定される。

**もう一人**は、秋戸みきさん（秋戸権太郎養女）当時33歳。子供が4人あった。場所は、自分の家の玄関土間。傷は左腕の肘をかすり斜め下から右肩に抜けるように入った。盲管銃創（銃弾が貫通せずからだの中に留まること）だったことからすれば、何かに当たってそれた銃弾が、伏せようとして身をかがめた瞬間に不幸にも命中したものと推定できる。

・尾駮集落も銃撃を受け尾駮国民学校に10数発が命中する。

8月10日

**尾駮・平沼・鷹架**が米軍艦載機の銃爆撃を受ける（青森・八戸・大湊）。攻撃隊1,364機、制空隊404機。

・午後3時12分、尾駮国民学校には百余発命中、1教室が倒壊、他の教室の硝子飛散。幸い生徒・職員に異状なし。尾駮集落の20戸焼失、11戸が倒壊し、戦災児童数47人の被害が出た。**平沼**では**2人**（女）銃弾により死傷する。そんな中でも子供たちは登校し、学校は停止しなかった。



常磐（装甲走行巡洋艦）

出典：フリー百科事典『ウィキペディア』



攻撃を受ける柳（松型駆逐艦）

出典：フリー百科事典『ウィキペディア』



二又神社（昭和48年）秋戸淳一氏より提供



二又集落（昭和48年）秋戸淳一氏より提供



榎ぶき屋根の尾駮集落  
昭和30年代 村史より

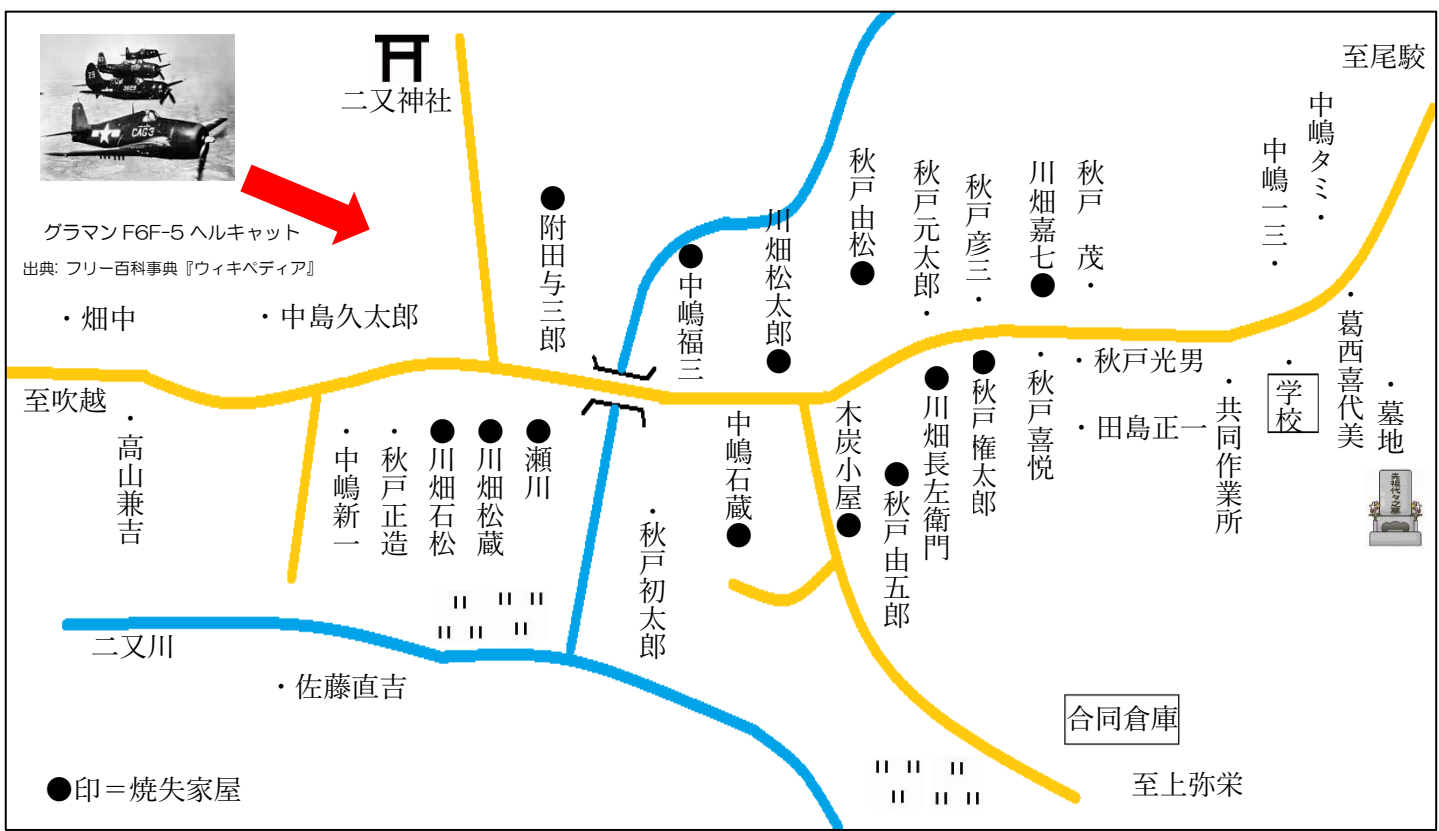


尾駮国民学校 1942(S17)年

出典：六ヶ所教育史（改訂版 1998）

8月14日  
1945 (昭和20) 年

日本はポツダム宣言を受諾する。  
冷害・台風・労働力不足等により、大凶作となる。主食配給は1日2合となる。



二又集落住居図 並びに 焼失家屋 昭和20年8月9日現在 ※ 旧二又小学校長天間松雄氏「空襲の記録」(1973年) 一部加筆



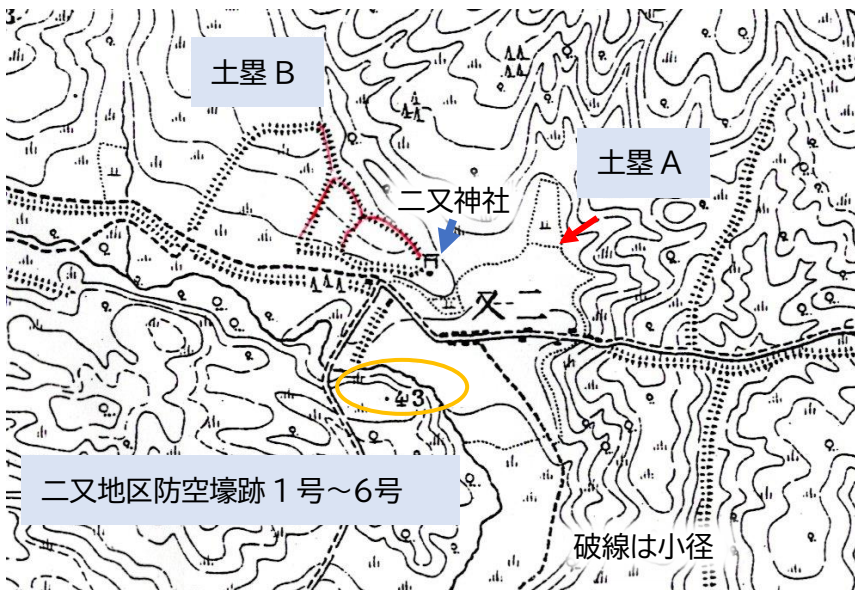
二又集落の風景 (昭和40年代) ※写真: 秋戸淳一氏より提供

# 二又地区の土塁と防空壕について

## 1 土塁について (調査1回目) ※2021.3.28 9:30~12:15 館長・秋戸淳一氏・秋戸操氏



二又地区の土塁と防空壕跡の位置 ※出典:国土地理院航空写真一部加筆



秋戸操氏の畑の北側にある土塁 A

※郷土館職員撮影

左の地図:大日本帝国陸地測量部

五万分一地形図 大正6年(1917)発行

- (1) 土塁 A: この土塁 (馬除け土手) は、高さ約 0.75m×幅約 2.65m で、操氏の畑の北側にある。秋戸慶典さんは「土塁だ」といい、「集落に馬が来ないようにしていた」そうだ。その北側に「放牧場があった」そうだ。「馬は土塁があるので、集落側に入って来なかったが、牛は土塁を壊して入ってきて大変だった。」そうだ。
- (2) 畑作業をしていた若松菊蔵さんの娘の方から「ここは馬がたくさんいたから、空襲されたんだ」と語り、山形で指導員をしていたお父さんが六ヶ所に土地を持って、開拓に4年生の頃に来られたそうだ。はじめ室ノ久保の三戸さん宅に身を寄せていて、弥栄に開拓で入ったそうだ。父は、30 数件の農家の指導を行っている、農林省の原原種農場の誘致にもかかわったそうだ。現在は、その地には弥栄閉村記念碑が立っている。二又に嫁に来て、戦争が始まり、空襲で蔵だけ残った家に嫁に来たが、栄養失調で1年は寝ていたそうだ。
- (3) 土塁 B: 二又神社の裏に土塁 B が現存していた。神社の裏側と西側の保存状態が良い。高さ約 0.84×幅

約 2.5m で、神社を囲むように残っている。北西に延びている土塁は、隣接すると土地の境界になっていて、高いところでは高さ約 1.5m ほどの土塁を観察できる。北西に約 200m の土塁が直線的に残っているが、大正時代から残っている土塁で、地域の方は、「土地の境界のための土塁が残っている」と思っていたようだ。



二又神社と石碑



二又神社の北側の土塁跡



二又神社の西側の土塁跡



二又神社の北西に延びる土塁跡



二又神社の裏にも防空壕があったようだ

※写真：郷土館職員撮影

## 2 防空壕について

(1) 二又防空壕 1 号から 5 号について (2021.3.28 と 2024.3.20 の調査結果から)

横浜六ヶ所線の二又の集落から二又川にかかる「まちみち橋」を渡り、左の川沿いに約 30m 進むと、南側の崖に 5 つの防空壕跡がある。西側から「二又防空壕 1 号からと 5 号」と名付けた。木の根っこの下を掘り、単体のものと繋がっているものがあるようだ (2 号と 3 号か)。10 号まであったようであるが、確認できなかった。更に 2024 年 3 月 20 日に、崩落している 6 号防空壕を確認。



二又防空壕への道



二又防空壕:奥から 1 号~5 号



5 号と 4 号



3 号



2 号

1 号

※防空壕等写真：郷土館職員撮影



1号の中にハクビシンがいた



2号の内部



3号の内部



4号の内部



5号の内部



6号の内部

(2)「昔は（S30年代）二又川が防空壕の近くまでできていた。奥にまだ5つくらいあった。大きな防空壕には缶詰など落ちていた。」そうだ。（操さん談）

(3)2024.2.24の調査（2回目）では、5号の防空壕の東側奥の崖に、天井が崩落していた大型の防空壕を確認した。6号防空壕と名付けた。

(4)二又の防空壕は、戦争当時の集落では、上・中・下と3ヶ所割り当てて作られていたようだ（区長さんの秋戸薫さんの話）。現在は、川沿いの上の防空壕だけが残っている。

- ・川沿いの上（10基中、6基残存している）
- ・神社裏の中（道路拡張のため、なくなったか）
- ・集落東側の旧二又小学校校舎裏の崖の下（現在、防空壕は埋められている）

※防空壕等写真：郷土館職員撮影



### 3 空襲当時の思い出（※旧二又小校長天間松雄著「空襲の記録」1973年）

#### 崩落していた6号防空壕

**秋戸宇之吉さんの空襲時の話**「私は附田さんに頼まれて、秋戸福太郎さんと、今の（現夢はぐ館）から更に西の三百メートルぐらい山の中に防空壕を掘っていました。子供たちもそばにいましたが、弾の音がするので蒲団をかぶせ営林署の山へやりました。私は、はじめ我慢していましたが、とてもできなくなり、やはりおなじ山へあがりましたが、もうそのときは附田さんの家からは火の手が上がっていました。これは大変、とにかく家の近くに帰らねばと考えたものの、道を走っては発見されるので、山の中だけ通って家のそばへ行ったのですが、その後も何回か機銃掃射があったので大木のかげにかくれたり、防空壕に入ったりして難を避けていました

**川畑百合さんの話**『・・・筆筒の一つを始末しているうちにうたれ始めました。機銃弾がウナリを上げて飛んでくるうちは頭を上げることもできませんでした。ただその場に身を伏せているだけでした。気がついてみたら家に火がついていて手がつけられない状況でした。・・・そうしているうちに・・・飛行機が又打ち始めます。「死ぬのは今か？・・・戦争に行った息子に会えずに死ぬのか」と思い、大声を上げて泣きました。（略）』

# 淡水二枚貝カワシンジュガイとコガタカワシンジュガイ

日本にはカワシンジュガイとコガタカワシンジュガイという2種類が生息しており、前者は北海道と山口県までの本州、後者は北海道と青森県、岩手県、長野県で生息が確認されている。

これらは、2022年(令和4年)、希少野生動植物種に指定され、捕獲及び譲渡が禁止された。

1 **カワシンジュガイ**：(川真珠貝) ヨーロッパでこの貝から真珠を採集してこの名がついた。

氷河時代の北方系の遺存種で、日本の分布が南限にあたる。

2 **コガタカワシンジュガイ**：六ヶ所村で生息していて、カワシンジュガイに比べると小形で、

通常は殻長が10cmを超えない。この貝は、カワシンジュガイと違ってコロニーをつくらず、カワシンジュガイより数が少ない。郷土館の2月と3月の調査では42個中、コガタカワシンジュガイは7個(約16.7%)確認されている。

3 二つの貝の見分け方は：この二つの貝の区別は外形では難しく、貝殻内の前閉殻筋痕の形で見分ける。カワシンジュガイの前閉殻筋痕の形は**丸い耳形状**で、コガタカワシンジュガイは**折れ曲がり尖った耳形状**となっている。



二又川



カワシンジュガイ



カワシンジュガイ



コガタカワシンジュガイ

※写真：郷土館職員撮影

4 **利用方法の歴史**：カワシンジュガイの内側が真珠層で、昔、ヨーロッパでボタンを作ったり、装飾品として使ったりしていた。日本では、カワシンジュガイの殻が縄文時代の遺跡から発掘されていて、縄文の人々が食用や装飾用に使っていたと考えられる。また、北海道のアイヌの人々は、カワシンジュガイの貝殻を「ピパ」と呼び、「穂摘み具」として昔から利用していた。



穂摘み具「ピパ」

※写真：郷土館職員撮影

5 **魚に寄生する**：カワシンジュガイ類はオスとメスがあり、卵からはグロキディウム幼生が生まれ、成熟すると川の水に放出され、宿主となるサケ科魚類(ヤマメ)のエラに触れると寄生する。稚貝になると宿主のエラから離れて川底で生活を始め、数年から数十年かけて大人の貝に成長していく。カワシンジュガイ類は、生態系においてとても重要な役割(水質浄化)を果たしており、適切な保全活動が必要である。※天然記念物指定市町村：岩手県岩泉町(町)・野田村(村)、岡山県真庭市(県)・長野市(市)・広島県庄原市(市)